# 浦賀文化

第７７号
令和６年４月１日発行

Email:uragabunka@yahoo.co.jp


## 鳳凰丸の建造①
### ― 建造掛の人選こぼれ話 ―

鳳凰丸模型（浦賀コミュニティセンター分館）

嘉永六年（一八五三年）六月にペリー艦隊の軍艦による江戸への接近を目の当たりにして強い危機感を覚えた幕府は江戸の防備を充実させるべく同年九月十五日、これまで禁止していた大船の建造を解禁した。これをきっかけに浦賀で日本初の洋式軍艦「鳳凰丸」が建造されることになるのだが、浦賀奉行所内ではこれに先駆けて建造の準備を進めており、九月七日には軍艦建造掛が選出されていた。

メンバーは、与力からは香山栄左衛門、田中信吾、中島三郎助、佐々倉桐太郎の四名、同心からは斎藤太郎助、中田佳太夫、田中半右衛門、春山弁蔵、岩田平作、田中来助の六名だった。その翌月、浅野勇之助、大久保鉦之助を加えたメンバーが老中阿部正弘から正式に「御軍艦并晨風丸形御船其外附属之品御製造御用掛」に任命され、この船の建造は幕府の正式な事業となった。

ただこの時、与力の田中信吾だけは「御軍艦并晨風丸形御船御打建御普請中見廻」、つまり軍艦建造中の見廻り役にされたとある。田中信吾は中島三郎助の父である中島清司とも名を連ねて異国船の対応に尽力してきた与力だったが、彼がこのような役回りとなったのは事情があったらしい。

ペリー来航当時の浦賀奉行戸田氏栄が同職江戸詰の井戸弘道に宛てた私信「南浦書信」の十一月二日付けの書翰の中で次のように記している。「田信（田中信吾）は御普請掛りさしゆるし、其他は緩々保養可致旨相達し、よくよく利解仕候、当春以来の事なから、亜船にて長□出勤いたし候事ニて、前日之引込は水ニ成候故、御暇申渡も余り早過候故、何分不都合、夫ら之処再々応組頭江申渡置候」これによると田中はかねてより「引込」すなわち引退を考えていたらしい。しかし「亜船」（ペリー艦隊）への対応があって引退は流れてしまった。それもあって「御普請掛」、つまり軍艦建造掛を「さしゆるし」たという。

引退を考えていた田中自身は建造掛になることに難色を示したが、この役ならと了承したのだろうか、見廻りという役に就いている。理由はわからないが少なくとも戸田としては田中に引退されると困るタイミングだったのだろう。

田中のことはしばらく戸田を悩ませたらしくこの後も「南浦書信」に話題が出てくる。十一月十二日付けの書翰では田中について「魯船之沙汰承り、一日も早く引込度趣ニて、御暇伺書さし出し申候」とある。この時にはロシア船ディアナ号が下田での地震により大破したため、その修理場所などについて対応を協議していた時で、そんな状況で田中が一日も早く引退したいと伺書を差し出してきたという。支配組頭や香山栄左衛門もいろいろと説得したが、一日も早く引退したいと聞かず、戸田も「不忠至極」とは思うが今まで引き留めていることでもあるのでどうしたらよいものかと途方に暮れている。

また、田中は与力の中でも地方掛であったようで、同日の書翰で戸田は引退については是非のないこととしながらも「跡地方と申すものニ甚た差支申候」と田中がやめた後の地方掛に支障があるとしている。理由としては、地方掛は本来の地方行政に関する業務だけでなく諸々の見積や普請の担当なども兼ねるため業務が多岐にわたり、人数を減らすことができない状況にあった。支配組頭が業務を引き受けてくれれば良いがこちらも頼りにならず、後任にできる人物もいないため「是ニは困り申し候」と困惑している。

その後も「南浦書信」を見ると、田中のことで戸田は井戸に相談をしていたようではあるが、詳しいことはわからない。ただ田中は嘉永七年正月のペリー再来航前には引退していたのか、御褒美の記録や以後の鳳凰丸関係の記録にも田中信吾の名前は出てこない。

（山本　慧）

南浦書信
（東京大学史料編纂所蔵）


★参考資料
・『新横須賀市史』　資料編　近世Ⅱ
・浦賀史学研究会編
「新訂臼井家文書」第二巻
・浦賀近世史研究会編
『南浦書信』（未来社、2002年）
・安達裕之『異様の船』（平凡社、1995年）



発行：浦賀行政センター　編集：浦賀コミュニティセンター分館　〒239-0822 横須賀市浦賀 7-2-1 ☎ 046-842-4121

# 浦賀奉行所跡の発掘調査（その五）

## 幕末から明治時代以降の浦賀奉行所跡

慶応四年（一八六八年）閏四月に浦賀奉行所は廃止されました。その跡地は海軍用地・陸軍用地・民有地と変遷し、昭和一六年（一九四一年）～二〇年（一九四五年）頃には浦賀ドックの工員宿舎が建てられ、昭和四一年（一九六六年）からは浦賀重工業株式会社、後に住友重機械工業株式会社浦賀工場の社宅になります。平成二九年（二〇一七年）年一二月にその跡地が横須賀市に寄贈されて現在に至っています。

図1は、それらの建物の配置図です。浦賀ドック工員宿舎の建物は、米軍撮影の航空写真に解体中の姿が朧げに残されているだけで詳細な記録は確認できません。構造は不明ですが、発見された基礎跡などから、幅約10・8m、長さ約36・5mの建物六棟とL字状の建物が浦賀役所跡地全面に配置されていたことが判明しました。建物は厚さ5cm前後のコンクリート土台の上に赤煉瓦やアス煉瓦（石炭ガラと消石灰が原料）を積んだ基礎の上に建てられた木造建築であったと思われます。

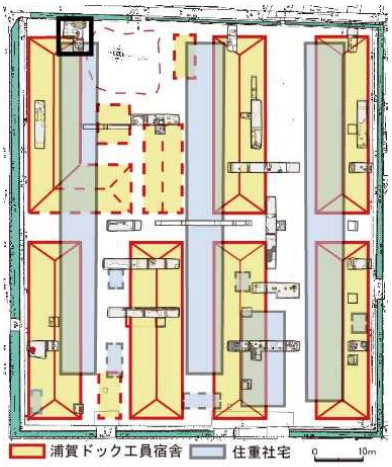

図1　昭和時代の浦賀奉行所跡

写真1　浦賀奉行所西堀跡と昭和時代の建物基礎

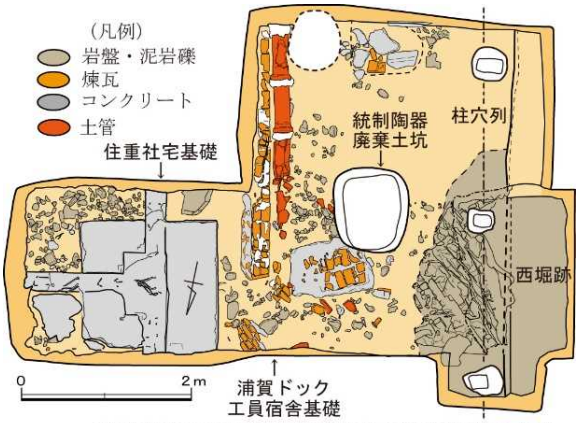

図2　浦賀奉行所西堀跡と昭和時代の建物基礎平面図

黒枠で囲った南西部の調査区を詳細に表したのが図2の平面図になります。安政二年（一八五五年）の増改築時に新たに掘られた素掘りの西堀の一部と塀跡の柱穴列などが確認され、その東側からは浦賀ドック工員宿舎のレンガ積基礎と常滑焼土管の排水管、住友重機械工業株式会社浦賀工場社宅の鉄筋コンクリート製の基礎などが並んで確認されました。（写真1）

幕末期から平成時代に至る浦賀奉行所とその跡地の履歴が窺える調査箇所です。

次回からは各時代の主な出土遺物について紹介していきます。

（中三川　昇）

★参考資料
・「浦賀奉行所〔役所〕跡の試掘・確認調査」横須賀市教委2021
・『浦賀奉行所開設301年　浦賀奉行所跡』横須賀市教委2021

## DockCafé 4

大正六年（一九一七年）、逓信省官僚であった今岡純一郎が浦賀船渠山下亀三郎社長に抜擢されて専務となった。今岡は、その五年後、七代目社長に就任する。当時、船舶業界は低迷期であり、浦賀船渠の経営もまた厳しい状況であった。そのような中にあっても、経費削減や勤務改革、陸上の機械製造等を兼営するなどして工場能力を維持した。また、帝大造船科卒だった今岡の知識を活かし船の性能を向上させるなどの構造改革にも着手、多くの新技術の開発を成功させる。その結果、浦賀ドックの代名詞ともいえる駆逐艦や青函連絡船の建造の更なる受注に繋がっていった。

そんな折、大正十二年九月、関東大震災が襲来、浦賀船渠は壊滅的被害を受ける。重ねて工場内からの出火と近隣からの延焼で工場の大部分を失う。社長自ら復興に向けて従業員に理解と協力を求める掲示を行っている。

今岡の手腕と尽力により、浦賀船渠は再び活気を取り戻し、造船所としての地位を確立した。しかし、その栄光の時を待たずして、今岡は昭和九年、六十歳の現職のときにこの世を去った。（江）

## マンホールカードってなぁに？

日本のマンホール蓋は、世界に誇れる文化物！マンホールカードは、それを広く楽しく伝える無料配布の「カード型パンフレット」です。

当館では、「浦賀奉行所300周年記念マンホール」のマンホールカードの配布を行っています。
ぜひお越しください。
（お一人様１枚）

詳細は、下水道広報プラットホーム（GKP）または横須賀市ホームページでご確認ください。